

主 題：クリスチャンの喜びの本質

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章1節－5節

きょうこの場に立たせていただくに当たり、神様からのみことばを正確に取り次がせていただきたいと思いますが、語る者の愚かなことばではなく、神様のみことばを知ってくださることができるように祈っています。

今まで何度か日曜礼拝でも学んでいるように、私たちは私たちに与えられた神様の恵みを神様に感謝し、それを喜んでいる者です。私たちに与えられた救いは神様との和解によるものです。その聖なる神様と私たちの和解は、御子イエス様が十字架上で死んでくださったことによって成り立ちました。そして神様は私たちに単に救いを与えられるだけではなく、私たちを永遠に子どもとして迎えてくださるといふ約束を与えてくださいました。その約束は守りの約束だけではなく、私たちが常に神様の姿、イエス様の姿に向かって成長させられ続けるという聖化の約束、そして遂にはイエス様と同じ栄光の体を与えられて天に迎え入れられるという栄化の約束と、そのような希望を持って私たちはこの世を歩むことができるようになりました。またその過程にあつては、御霊が私たちに内住として与えられて、その御霊によっていろいろな賜物をいただき、互いに仕え合うことによってイエス様のからだである教会を建て上げ、ともに成長し、遂には霊的に完全な大人になってイエス様の身文に達するというところまで約束されています。

そして私たちは、御子と御父なる神様との間の交わりに入れられて、その交わりを喜びながら天に向かって進んでいくと、このようなことがみことばに書かれています。私たちは既にそのようなことを知っているのです。知っているのですが、その「知っている」の中には二つの意味があると思います。一つはみことばに書かれている文字どおりの理解、あるいはその理解には文字どおりであってもいろいろな程度があつて、ある人はただ関連なく一つ一つのことを知識として知っているだけかもしれませんし、ある人はそれらの間の関連性を具体的に理解しているかもしれません。しかし、その「知る」ということの中には、私たちがそのみことばを実践する中であつて、神様の実際の姿というのを体験し、どのような神様であるかを確信を持って知るという「知る」もあるということがわかります。

きょうは「クリスチャンの喜びの本質」というメッセージのタイトルをつけましたが、結論から言うと、このクリスチャンの喜びの本質というのは神ご自身であるということだと思えます。ヨハネ1：1－5から神様のあり方について見て行く中で、そのことについて具体的に説明していこうと思えます。

このヨハネの福音書というのは、ほかの三つの共観福音書とは違って、イエスの生涯について世の始まりから記述しています。ということは、つまりイエスはその世の始まりのところから既に存在されていたということを意味しています。そしてヨハネは召されてから長い間、老年に至るまでイエスにつき従い、イエス・キリストという人物を見て来た中で、この方の生涯を描くとすれば、創造の初めから描かなくてはならないという結論に達したということがわかります。ヨハネの福音書は紀元80－90年ごろにかけて、ほかの三つの福音書よりはかなり下った時代に書かれています。したがってその中にはヨハネの信仰の集大成としての深い思想が含まれていて、子なる神キリストについての非常に重要なことをヨハネ1章の最初、プロローグのところでも見ることができます。

それではヨハネ1：1－5までお読みしたいと思います。

:1 初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。

:2 この方は、初めに神とともにおられた。

:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

:4 この方にいのちがあつた。このいのちは人の光であつた。

:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかつた。

1. 神なるキリスト 1節

まず、1節では神なるキリストということを書いてあります。

1) 初めに：この世の最初に

「初めに、」とありますが、この「初めに」は創世記1：1の「初めに、神が天と地を創造した。」の「初めに」と対応することばです。「創造の初めに」、「最初に」という意味です。「ことばがあつた」の「ことば」については、イエス・キリストのことを指しているということはお存じの方も多いかと思えます。つまり子なる神は天地創造よりも前から存在していた、このことをもって子なる神の神性—神様としての性質が明らかになっていると言えます。

2) ログス

そしてこの「ことば」というのはギリシャ語では「ロゴス」ということばが使われています。これは私たちに非常に耳慣れないことばです。大学で哲学などの授業を取った方はご存じかもしれませんが、「心の中にある考え」と実際その考えが口から発せられた「話されたことば」という大きく二つの意味があります。これを聖書的にとらえますと、「神様の御旨」であり「神様が語られたみことば」であると取ることができます。

◎ 意味の歴史的变化（BC500年～AD90年）

ここで、ヨハネがこのロゴスということばを使った背景について、そのことばの歴史的变化を見て行きます。神がヨハネを通して靈感されたこのことばが当時どういう意味を持っていたのかを知ることによって、私たちにこのことばに対する理解を与えてくれると思うからです。

まず、この「ロゴス」ということばは「ミュートス」ということばの反意語、反対語になっています。ロゴスは「論証」や「理性」、ミュートスは「神話」や「空想」といった意味があります。

① エペソの哲学者ヘラクレイトス

またエペソの哲学者であったヘラクレイトスが「世界の根源原理」という意味で用いたことも知られています。

② ストア派哲学者

そしてその時代にあったギリシャの哲学者の一派であるストア派の人たちは、これは「世界を合目的に支配する原理」として考えました。合目的的というのは、この世界の中にあるすべての造られた物や作られた仕組み、世の中の摂理というのは一つの目的を持っているということです。例えば椅子は座るために作られている。例えば雨が降ったら、それは地上を潤し、植物を繁殖させるためであるというふうに、その目的を見て取ることができます。このように世界の成り立ちや、今そこに起こっているいろいろな現象は、その目的を設定することによってよりよく理解されるという意味で、その世界を合目的に支配する、そのような原理のことを彼らは「ロゴス」と呼びました。目的があるということはその中に何らかの意思が働いているということになります。この意思のことを彼らは「神」と言いました。この異教の世界の中で、自然崇拜の神、その神の中で一つの要素としてはその神が人格を持っておられるということです。人格を持つということは、そこで何らかの意思を持っているということです。ですから、そのような類似性からこの哲学者たちはこの世界の原理を神と同一視しました。当然それは彼らの考えた神であって、私たちが聖書から教えられている神とは全く違います。ですが、用語としては「神」という範疇に入るものとして彼らは理解していました。

③ 七十人訳旧約聖書

以上はギリシャの世界、ヘレニズムの原理の中で考えられた「ロゴス」ということばですが、当時、ヘレニズムと相対する考え方、文化としてヘブライズムというのがありました。これはユダヤ人たちが歴史的に神様から与えられた律法をもとに、いろいろな世界観や価値観を形成していました。紀元前3-1世紀にかけて72人の人が翻訳者となって長い時間をかけて旧約聖書をギリシャ語に翻訳した七十人訳聖書というのがあります。その中では旧約聖書のヘブル語で「ダバール」と呼ばれていることばが「ロゴス」と訳されています。ですからギリシャの世界だけではなく、ユダヤの世界においても、この七十人訳聖書を通して「ロゴス」ということばはかなり一般的になっていたと考えられます。

④ アレキサンドリアの哲学者フィロン

それから少し時代が下りまして、ヘレニズム時代、ギリシャの文化が東洋の文化と融合していろいろな哲学や自然科学を含めた発展を遂げた時代になると、この「ロゴス」ということばは「世界を定める理」と理解されました。こういった時代の中にあって、ちょうどBC15年ぐらいから紀元0年ぐらいの間の哲学者であったアレキサンドリアのフィロンという人がいますが、この人はストア派哲学の影響を受けながら、自身ユダヤ人であったので、旧約聖書の解釈をストア派哲学の教義に基づいて行いました。これがそのヘレニズム世界とヘブライズム世界の間の橋渡しになるので、このフィロンという人のロゴスの用い方について見るのは、このヨハネの時代のロゴスということばに対する人々の理解を知る上で最も参考になるかと思えます。この人は旧約聖書の注解、解釈をしたので、その例を出しました。例えば「剣」ということばをフィロンはロゴスと同じもののだとして論じています。その「剣」ということばが旧約聖書に出てくる場所として二つ例を挙げました。

一つは創世記3：24「こうして、神は……エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」、ここでフィロンはこの「剣」がロゴスの働きであって、それは神の慈愛と主権が調和する、そのような働きを表していると解釈しました。「いのちの木」に至る道を守るために「ケルビムと……炎の剣を置かれた」ということですが、人間に対する神のさばきということもあるのですが、そのさばきの部分が神の主権であって、神はさばきを与えながらも人間に対するその後の救いの計画を持っておられ

たわけで、そのようなことを調和する働きとして、ロゴス、「炎の剣」というのが書かれていると彼は解釈しています。

また民数記 22 : 29、バラクという王がバラムという預言者にイスラエルに対してにせの預言をするように強要しましたが、バラムも神の預言者でありながら、それを断ることなくその預言をしようと動いていた時に、神様の使いが彼の前に現れて、彼が乗っていたロバはそれを恐れて道から外れた。そしてバラムとロバは争いをするのですが、そこでバラムは私が「剣」を持っていたらあなたを殺したであろうと言います。そうすると、ロバはそのバラムに対して、あなたは預言者でありながらそういう間違っただけの行いをするのかと言います。そこでその「剣」が神様のみこころとイコールになって、バラムはその「剣」を持っていなかった、つまりバラムは預言者でありながら、神様のみこころを正しく理解していなかった、つまりにせの預言をするということに対する罪の意識が薄かったということを表しているのだと解釈しています。

⑤ 紀元 90 年ごろ

このように、この福音書が書かれた紀元 90 年ごろには、ロゴスの意味がこういう哲学的背景をもって理解されていたと同時に、この哲学的背景の中で私たちが持っている神様像に近いところまでは行っていたという状況を見ることができます。しかし、ヨハネはこのロゴスを単なる世界の原理や神と世界との仲介者という意味ではなくて、神の御子キリストとしてという意味でこの福音書の中で用いています。同じヨハネの著作による黙示録 19 : 13 には「神のことば」ということでキリストのことが描かれています。

3) とともに (プロス)

こうしてこのことばが御子キリストを表すということで、1 : 1 の次の表現は「ことばは神とともにあった」とあります。この「とともに」ということばは「プロス」というギリシャ語の前置詞です。この「プロス」というのはギリシャ語においては二つの意味があって、まず一つは「運動や行為の方向」、二つ目は「親しい交わりの中にある」という意味があります。古典的なギリシャ語の意味では初めの意味がほとんど主流ですが、まれに〜と親しい交わりの中にあるという使われ方もあって、例えばマルコ 6 : 3 でそのような意味で使われています。そのような意味にとると、この神様とともにあるというのは父なる神と親しい交わりの中にあったという意味になります。そのような子なる神様との共通性、交わりということをもって、この「ことば」という方が神であったと説明しています。

4) ことばは神

そして次の表現ですが、「ことばは神であった」と書かれています。日本語ではこうなっていますが、もとの語順は「神である、このことばは」というふうに、神ということばが文頭に来て強調される表現になっています。ここの「神」ということばには冠詞がありません。冠詞がなかったらどういう意味になるのかというと、ひとりの神であったではなく、ことば、ロゴスは神の本質を持つ何らかのものであったというような漠然とした意味になります。もし逆にそこに冠詞がついていたとしたら、ロゴスがひとりの神であって、ほかに神はいないとなるのですが、教理的に言うとならば父なる神も御霊も神様なのでそれはおかしいのです。そこでは神の本質を持つものということで、このロゴスなる神は第 2 位格の御子なる神であることを表しています。そして、その神の本質を持つものというのがどういう意味になるかというと、このロゴスで表されている御子という方と父なる神、御父とは違う人格であるけれども、本質において等しいという意味になります。同じようなその意味を支持する箇所として、例えばヨハネ 10 : 30 や 14 : 9 に御子と御「父とは一つです」と表されています。

5) であった

そしてまた「ことばは神であった」の「であった」という動詞が未完了過去形ということで、どういう意味になるかというと、ロゴスは既に旧約時代において働かされていたという過去のことを暗示しています。ロゴスは神であったという現在の状況とともに、ロゴスについて未完了過去を使うことによって旧約時代におけるロゴスの働きを暗示する表現になっています。旧約聖書の中には受肉前のロゴス、つまりイエス・キリストが神の使いという形で人々に働く様子が多数書かれています。それはこのロゴスが単に「ことば」、神様のご意思という抽象的は問題ではなく、具体的に人々に働かれた人格という意味で書かれています。例えば、創世記 16 : 7-14 にサライの女奴隷であったハガルが子どもを宿した時、サライに対して横柄な態度を取ったことに怒ったサライがハガルに冷たい仕打ちをし、それを嫌がったハガルがサライのもとから逃亡するという話があります。そこに神様の使いが現れて、あなたがしていることは正しくない、あなたはサライの女奴隷として召されたのだから、彼女のもとに帰り、身を低くしなさいと教える場面があります。このように神様は自分のみこころを旧約聖書の中で言う律法のみことばだけではなくて、各個人に具体的に働いておられる様子があります。ほかに、アブラハムがイサクを捧げようとした時に彼を止めたり、ヤコブに故郷に帰るように命じられた場面や燃える柴の

炎の中に現れてモーセに語った神の使いなど。そのほかにもいろいろな場面で神様に忠実なしもべに神様のみこころを示すために具体的な人格としての姿を見せて、ロゴスは人々に働かれたことを見ることが出来ます。

旧約では神様の御旨を表すために「知恵」ということばが多数回出てきます。神様は律法によりみこころ、何が神様に喜ばれることなのかを表され、それが知恵と考えられるのですが、その知恵ということばはここで見るとほぼロゴスと同じ意味だと考えられます。しかし、その知恵ないしはロゴスということばは単に神様のことば、紙に書かれたことば、石に書かれたことばだけではなくて、実際に人格としても神様の使いとして信じる人に現れて働かれたということが旧約で書かれています。私たちも単にその知恵が人を賢くするものではなくて、それが実際に神様に喜ばれることであるということを知っています。ですから私たちはそのロゴスや知恵というものによって日常生活の実際の歩みの中で導きを与えられ、そしてそれに従うことができる。そのような存在がロゴスであると言うことができます。以上、神としてのロゴス、ことばの説明です。

2. 神とともになるキリスト 2節

2節になると「この方は、……神とともにおられた。」という説明が出てきます。この「ともに」というのは1節と全く同じプロスということばで、神との親しい交わりの中にあるということですが、ここでその交わりがどんなものであったかというものを見るために箴言8：27-31を見たいと思います。

:27 神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。

:28 神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、

:29 海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、

:30 わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、

:31 神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。

これは明らかに創造の場面ですが、その中でこの語り手である御子なるロゴスがどのように神様との関係を喜んでいたのかということが最後の2節に書かれています。「わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ」とありますし、31節「人の子らを喜んだ」と、御子が神としてその被造物である人間の喜びを共有している状況を見て取ることができます。ここで「神とともに」と書かれているこの状況が御子にとっていかに好ましく楽しいものであったのかということをおぼろげに忘れることはありません。それはこの御子が最終的には神様のみこころに従って、神様との交わりを捨ててこの世にいられて、私たちのために犠牲になったということを知るからです。神とともにある祝福を捨てられた御子キリストの愛というのは人間に理解不能な愛と謙遜を示していることがわかるからです。しかもその目的は同じ祝福を私たち信じる者に与えるためであったということをおぼろげに忘れることはありません。この御子と御父の交わりが究極的には私たちが神様から約束されている交わり、御父及び御子キリストとの交わりと同じものであるということは1ヨハネ1：3に「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」と示されています。このように神とともになるキリストということは私たちにキリストの神性、神である性質を教えるだけではなくて、キリストの私たちに對する愛、そしてまたその犠牲の大きさをしっかりと理解させるものとなっています。

3. 創造主なるキリスト 3節

次に1：3では御子キリストの創造に関する関係性ということをおぼろげに述べています。御子キリストの創造へのかかわりについてはコロサイでも同じように述べられていますが、ここでも「すべてのものは」という万物の創造の表現からもわかるように、御子は直接的に創造に関わっています。

「造られた」ということばは、不定過去形ということによってその過去の事象がもう終わっている、要するに過去のある時点で創造というわざがあったよということをおぼろげに意味しています。造られたすべてのものは創造のわざによって存在することになったと過去への言及です。

それを今説明しているのは、同じ造られたものでも、「造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」という二つ目の文章の「造られた」とは時制が違うからです。つまり「造られたもの」はすべてこの方によって造られたという過去の事象をただ説明するのと、私たちの周りにある被造物を見る時にという、現在の視点から見るとというのが少し違う表現になっているからです。

いずれにしても、創造の中には「光」と「いのち」というのが創世記の中にも出てきます。1：3にもあるように「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」と、まず「光」を創造され、後から「いのち」あるものを創造されていることがわかります。そしてその創造のわざを見る時に、私たちは神が義務的にまたルーチン的にそういうものを創造したのではなくて、その創造のわざ全体から神が非常に創造的な本性を持った方であるということをおぼろげに知ることができます。このことは4-5節に出てくる、神様によって与えられる「光」と「いのち」についてのヒントを与えてくれるから、ここで説明しています。先ほども言いましたように、3節後半の「造られたもので、この方によらずにできたものは一

つもない」というのは「造られたもの」というのを見てみると、それが御子によって造られたという、今の状況を見た時に、それが過去への思いを彷彿するものであるという視点で著者は完了形で書いています。現在の状況が過去に遡られているという見方になっています。以上のところで御子の創造への関わりというのがわかります。

4. いのちなるキリスト 4節

先ほども申しましたとおり、創造の中には「いのち」と「光」が非常に重要な要素として働いています。それで4節はその「いのち」と「光」という視点から、実際神様がどのように私たちに働いているのかを明らかにしてくれます。4節では「この方にいのちがあった」とあります。「いのち」ということばを考えると、辞書的な意味で「息がある」とか「活力がある」、「生きて動く」などがあります。ここでは特に神様から来る「いのち」、霊的「いのち」のことを意味することはわかるのですが、それが「あった」という未完了過去形で書かれていることで、「いのち」が継続して御子の中にあるということの意味をしています。それが「この方にいのちがあった」という意味です。

すべてのものが御子によって、神様のご意思によって創造されたゆえに、その「いのち」の働きは神様によって強められることができます。ヨハネの福音書の中に語られているイエスの奇跡は、私たちに對して肉体的にも霊的にも人間本来あるべき姿に戻すことができる神様の創造の力を認識するようというように書かれているのです。5：26、6：48、11：25に記されているのが神様が私たちに与えられる「いのち」の意味です。ヨハネの福音書15：4にあるように、私たちが神様にとどまり、イエス・キリストとつながっていて、みことばにとどまっている時に「実を結ぶことが」できるというのは、私たちの中にある本来のいのちが超自然的な神様の力によって強められることができるということです。そして神様と個人的関係を保ち、みことばに忠実に生きる時に、私たちは御霊の実を得ることもできます。そのことは私たちがキリストに似た者とし、また状況によらない平安や喜び、神様の平安や喜びを得ることができるということです。

反面、私たちがそういったいのちをもし得ていないとしたらどうでしょうか。それは私たちに物質的ないのちはあったとしても、それは死とか滅びであって、もし神様との関係の修復やそれをもたらす贖いによる和解がなかったとしたら、私たちはそのいのちを永遠に持つことはできません。「永遠のいのち」という表現がヨハネの福音書には多数回出てきますが、それはそういったことを説明するためになされていると考えられます。また霊的ないのち、永遠に続くもの、そういったものはその源泉が「いのち」を創造した神様ですから、人間のいのちはやがて朽ちるものであって、私たちはそれにこだわっていても仕方がないということも同時に考えつくことができます。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、」（ヨハネ12：25）という聖句がありますけれども、そのように私たちは肉体のいのちだけを持っていても仕方がないということを経験する必要があります。

「いのちの～」という表現はヨハネの黙示録の中に多く出てきます。こういった「いのちの書」（3：5、13：8、17：8、20：12・15、21：27、22：19）とか「いのちの木」（2：7、22：14）、「いのちの水」（7：17、21：6、22：1・17）という表現は、それらが神様を信じた人に与えられる神様の祝福という意味で用いられていることを私たちは見ることができます。ですが、私たちはそういったことをたくさん読むのですが、実際私たちに与えられているこの喜びの源泉が神様にあるということを十分感じているのでしょうか？感じているというのは、感情で感じるという意味ではなくて、先ほど「知っている」には幾つかの段階があるということを示しましたけれども、実際その喜びの源泉が神様であるということを十分認識しているのでしょうかという意味です。実のところそれはどうかなと思われる方もおられるかと思えます。しかし、それを私たちが感じていない限り、神様に働かれた霊的な「いのち」というのは私たちの中で本物になっていないことがわかると思います。

5. 光なるキリスト 4-5節

次に、「いのち」とほぼ同じ意味として「光」ということばが使われています。4節の後半に「このいのちは人の光であった。」と書かれています。「人の」というのは人にとってのという意味で、その「光」が人間にとって光のようなものであるという意味です。「光」は分け隔てなく真っ直ぐ進む、それゆえに闇や陰を照らし分けている、またそれが当たっている全体は明るく照らされて細かいところまでよく判別できるようにする、そして照らして暖めることもできるので、神様の本質である神様の主権や全能、そしてまた聖さや知恵、愛や真実などを比喩的に表しています。

聖書の中では真実と愛を「光」、そしてその反対の人間と人間の世の罪と憎悪を「闇」と表していることがわかります。そして「いのち」というのは今も人にとって「光」であるということで、ここは未完了過去という時制が使われています。ですから御子は生きて働くことばであって、「いのち」であり、「光」であるとまとめることができます。

後で出てきますが、「光」は闇の中に姿を現すのですが、逆に闇があることによって「光」を消すことはできないというのは、「光」の性質を考えれば容易にわかることです。

そしてまた「輝いている」というのは、今もこの闇の世の中で「光」が一筋に光として私たちクリスチャンには光り続けているということで現在形が使われています。

そして最後、「打ち勝たなかった」ということばは、既に結果が確定しているという意味の時制が使われていて、そのことばには「消す、滅ぼす」と「理解する、所有する」という二つの意味があります。もし初めの意味にとらえたら、この聖書にあるように、「やみはこれに打ち勝たなかった」ということでやみの勢力が光の勢力に対して劣勢であったという意味になるのですが、もし「理解する、所有する」という意味にとらえたら、やみに属する人は光の値打ちを理解することができなかつたとなります。信じない人は神とともに祝福を理解できず、しかもそれが確定しているという意味になります。この解釈をサポートすることとして、10節後半「世はこの方を知らなかった。」や11節後半「ご自分の民は受け入れなかった」、3：19で「光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。」と支持する箇所はヨハネの中にもたくさんあります。それでここではそういう解釈ではないかと考えています。

◎ 適用——救われたクリスチャンとして——

しかし、私たちはこういう「光」や「ことば」をなぜ喜ぶのでしょうか。最初の疑問に戻ります。クリスチャンとしてその喜びの源泉はどこにあるのでしょうか？つまり私たちが今ヨハネが述べてくれた神様のことを単に知識としてではなく、実際に私たちの体験として知る時に、この神様を愛するようになるということです。私たちの喜びの源泉にはいろいろありますが、少なくとも喜んでいてる対象を好きでないとはいけないと思います。ある状況が好きである、ある人が好きである、あることが好きである時に私たちは喜ぶのだと思います。これを適用すると、もし私たちが神様ご自身を喜んでいないとしたら私たちは本当に喜んでいるのでしょうか？神様ご自身ということは、神様のご意思、神様の御旨、そして神様の計らいです。私たちが信仰生活を送っている中には、日々いろいろな労苦や人との軋轢があります。ただそういったことがすべて神様の支配下にあると考えた場合に、その神様の働きを私たちは本当にアーメンと言って受け入れることができているのでしょうか？ある時は疑いながら、「なぜだかわかりません、神様。でも私は神様がそう言われるならそうです」という受け身的な反応になっていないのでしょうか。私たちが本当に喜ぶためには神様がなさっていることを十分に信頼し、そしてその信頼のためには、神様がどういう方であるかを、ヨハネが語っているように私たちが経験的に知り、それを本当に愛することです。

それを適用として三つの側面から考えてみました。

□ 証し

まず一つは、証しということです。私たちは「ロゴス」は単なることばではなくて、生きて私たち人間に働く人格だということを知りました。私たちが語るべき福音とは単なる神様のメッセージではありません。もちろん私たちのために死んでよみがえられたイエスの十字架のことは含むのですが、それを情報として伝えたからと言って私たちが語るべきことは半分しか語られていません。それに加えて神様がこの愛する世を堕落から救うために遣わされた御子が身をもって表されている神様ご自身のご性質やそのことばやそのわざや人格、それを私たちは伝える必要があるのです。そしてそれをどう伝えるかという、それは私たち自身を通してキリストの似姿を証ししなければいけないということになります。

□ 人間の必要

また、私たちが覚えておかなければいけないのは、他人の必要にこころを配ることです。私たちは救いを得ているのですが、人間は救われることがどうしても必要だということを常に覚えることです。神様は罪を見過ごすことがおできにならない方です。そのような聖い神様との和解が人間にとって最終的な幸せであり、喜びであるということを私たちは知っているのですから、それを人々の最も大きな必要と考える必要があります。そしてそれを実感する必要があります。そして神様はすべての人が神様に従順になることを望んでおられるということも知っておく必要があります。

□ 霊的成長

最後に、どのように霊的成長するのかということですが、与えられているみことばが「光」となって、私たちに神様に対する理解を与え、そしてその与えられている「いのち」が私たちにそれを実践する力を与える。そのようになるのですから、その源が御子キリストであるということをお忘れはいけないうし、私たちが神から来ない「光」や「いのち」によってそれをなそうとしてもそれは無理な話です。ですから常にこの御子キリストがどのような「いのち」を持っておられ、どのような「光」を私たちに下さるのかということをおみことばからしっかりと把握して、そのことによって、その確信の上に私たちは信仰生活を歩む必要があります。そして、みことばを通して神である御子キリストを知ること

はクリスチャンの喜びの本質であるはずですが、もし御子キリストの御旨に私たちが完全に同意することができたとしたら、私たちは真の意味で神を愛し、その愛に基づいて信仰成長を遂げていくことができるということです。聖化という働きは、言ってみれば神を知る知識、それも知恵として知る知識において成長することであり、そのことによって、人や状況に対する感情や思いが正しくされ、外面的な振る舞いやことばがキリストに似た者になることではないでしょうか。

今週もまた新しい1週間が与えられています。きょうヨハネが教えてくれたことをもとにして私たちが神様を喜んで歩んでいきたいと思えます。